

『帝王の不埒な愛玩』

著：真崎ひかる

ill：國沢 智

カード台の周囲に、少しずつ人が集まってきている。チラチラと視線を感じて、恐ろしく居心地が悪い。

「スリーカード」

「……ストレートフラッシュ」

テーブル上にカードが示されるたびに、周りを囲む見物人の中にさざ波のような歓声が広がる。

ディーラーの脇に立たされている多喜は、目の前で繰り広げられるカードゲームを冷めた心情で眺めていた。

五人連続で勝ち抜き戦を制した者の勝ち、景品は『自分』だ。冷めた気分にもなる。

たった今、三人目を破った中年の男と視線が合い……ニヤリと笑いかけられた瞬間、ゾッと背筋に悪寒が走った。

このままその男が勝ち抜き、景品となって……どんな目に遭う？

想像力の限界だ。具体的なことはわからない。ただ、ロクなことにならないとだけは予想がつく。

「……無理」

ぽつりとつぶやいた多喜は、自分では確かめることができないけれど青褪めた顔をしているはずだ。

ダメだ。このまま、黙って成り行きに身を任せることはできない。かといって、この状況では逃げ出すことも不可能だろう。

ではどうすれば、この窮地を脱することができるか……。

「あ」

思考をフル回転させていた多喜だが、真っ暗だった視界にふと一筋の希望の光が差した気がして小声を漏らす。

先ほどから続く、勝ち抜き戦。参加条件は、ここにいるすべての男女。

それなら……。

「おれ……僕も、ゲームに参加させてもらっていいですか」

多喜が自らゲームに参戦して、勝ち抜いてしまえばいいのでは。

苦し紛れの思いつきだけれど、そうする以外に自分を救済する術はないと……おずおずと拳手をやる。

さほど大きな声を出したつもりはないのだが、多喜の声はディーラーだけでなく、カード台を

困んでいる大半の人間の耳に届いたらしい。

シン、と沈黙が落ちた。

注目を集めていることは感じるが、引っ込みがつかない。

「はっ……本気か？」

「もちろんです」

ディーラーを務めている黒服の男に尋ねられ、躊躇いなくうなずいた。こんなこと、冗談で言い出せるものか。

ようやく、思いついた打開策だ。どうにかして参戦を認めてもらい、なにより大事なものは……五連勝することだ。

すべて思い通りにコトを運ぶのは容易ではないとわかっているが、それ以外に妙案を思いつかないのだからどうしようもない。

「ふ……ん。そうだな」

思案の表情を浮かべた黒服が、顔を背けてボソボソと小声で誰かと会話をする。どうやら、小型のインターカムで、どこかと連絡を取っているようだ。

上の立場の人間に、相談していたのかもしれない。

息を詰めてディーラーの返事を待つ。ほんの数分が、やけに長く感じた。

「……許可が出た」

短いやり取りの後、ディーラーが多喜にチラリと目を向けてカード台に視線を移す。

これは……参加を許された、ということだろう。

コクンと喉を鳴らした多喜は、うなずいてカード台を回り込んだ。

せっかく得たチャンスだ。絶対に勝ち抜いてやる……と決意を固め、これまでのゲーム参加者と同じ一本足のスツールに腰を下ろした。

「……四人目」

一人勝ち抜くごとに歓声が上がっていたけれど、多喜が四人目の男を負かした瞬間その場に広がったのは奇妙な沈黙だった。

大きく肩で息をついた多喜は、顔を上げてディーラーの黒服と視線を絡ませた。多喜が勝ち抜くのは予想外だったらしく、黒服は淡い照明の中でもわかる苦い表情で多喜を見詰め返してくる。

緊張と昂揚感のせいで、手のひらに冷たい汗が滲んでいる。喉がカラカラに渇き、気休め程度に唇を舐めて湿らせた。

見物人から差し入れられたカクテルグラスがカード台の隅に置かれているけれど、口をつける気にはなれない。

どれくらい沈黙が続いたのだろうか。

「次の対戦相手は？」

ディーラー役を務めている黒服の声には焦りが滲んでいる。

五人目の挑戦者が隣のスツールに腰かけるのを待っていると、多喜の背後に目を遣ったディーラーが一点で視線を留めて「あ」と短く零した。

その目が驚愕を示してじわりと見開かれ、多喜は、そこになにがある？ と背後に身体を捻ろうとした。

「……なに……」

「俺が相手をしよう」

ほんの少し身体の向きを変えたところで、肩に大きな手が置かれる。多喜の視界の端に、ダークグレーのスーツに包まれた腕と白いシャツの袖口、そこから覗く明らかに高級品だと見て取れる時計が入った。

「俺が参加することに、異議はないだろう」

低い男の声だ。多喜の肩に置かれている、やけに大きな手の主のものだろう。

周囲は、水を打ったように静まり返っている。奇妙な緊張感が漂い、空気がピリピリと張り詰めているのを感じた。

なんだ？ ディーラーの黒服だけでなく、場の空気が変わるほどの……どんな人物がここにいる？

コクンと喉を鳴らした多喜は、自分の脇に立っている男を恐る恐る見上げた。

その直後、視界を手のひらに覆われてビクリと肩を竦ませる。

「へえ……モニター越しに見るより、いいな。ゲームに飛び入り参加した景品は、初めてだぞ。面白いヤツだ」

大きな手で多喜の前髪を掻き上げた男は、背を屈めて顔を覗き込んでくる。正体不明の男と間近で視線が絡み、瞬間的に息を詰めた。

有り体に言えば、怖いくらいに整った容貌だ。先祖のどこかで外国の血が混じっているのか、アジア人にしては彫りが深く目鼻立ちがハッキリとしている。

なにより印象的なのは、目の前の獲物を見定めようとするかのような鋭い視線だ。目が合った多喜は、身動き一つできない。視線を逸らすことさえ許されず、息苦しいほどの緊張感に全身を包まれる。

この男は、まるで帝王だ。支配者独特のオーラを隠そうともせず、周りから畏怖に近い視線を浴びることを楽しんでいる。

借金の取り立てに来るような下っ端の男たちや、ゲーム台を取り仕切っている黒服たちとの格の違いを、一瞬で理解した。

声もない多喜に、男は落ち着いた声で静かに話しかけてくる。

「新入りだな。なにをやってここで働くことになったのか知らないが、俺に勝てば無罪放免にしてやる」

予想もしていなかった台詞だ。眉を顰めて男の言葉を心の中で復唱し、ようやくその意味を悟る。

間違いなく怪訝な顔をしているだろう多喜は、なんとか声を絞り出すことに成功した。

「……そんなの、勝手に決めて……」

「ここでは、俺が法律だ」

声もなく目を睨ると、一切の気負いを感じさせることなくサラリと言い切った男を、マジマジと見詰め返した。

つまり、この男が『遊び場』の元締めということか？

ただ、それにしても若い。

薄暗いのでハッキリと見えないし正確にはわからないが、威風堂々としていても三十……半ばに達していないのでは。

無言で男を観察していると、多喜を見ている男がふっと微笑を浮かべた。

「ビビってないわけでもなく、俺から目を逸らさない、か。いい度胸だな」

「あ……」

そんな言葉で、不躰に見詰めていたことを自覚して、ぎこちなく目を逸らした。多喜の前髪を掻き上げていた手が離されて、ようやくうつむくことができる。

緊張から解放された多喜は、ふっと息をつく。

自覚していたより神経が張り詰めていたのか、心臓が激しく脈打っていることによりやく気がつく。

ビビったりなんか、しない。こんな……怪しげなカジノを取り仕切っているような人間に、怯む姿を見せるのは悔しい。

そうして自身を奮い立たせる多喜を嘲笑うかのように、隣の椅子に腰を下ろした男が話しかけてきた。

「どうする？ 勝負をするか？」

「……もちろんです」

「いい返事だ。……俺が勝ったら、おまえは俺のモノだ」

目を細めてうっすらと笑う男に、一瞬だけやめておいたほうがよかったかと……チリッと嫌な予感が胸を引っ掻いたけれど、今更「やっぱりやめる」などと言えるわけがない。

勝負を続けようが降りようが、多喜に逃げ場はないのだ。それなら、放免される可能性があるほうに賭けて挑んだほうがいい。

多喜が決意を固めたことを見透かしたかのようなタイミングで、男がカードを指差して尋ねてきた。

「ポーカー、ブラックジャック、ジン・ラミー……どれにする？」

自身の得意なものを指定するのではなく、多喜に選ばせようというあたりからして余裕の表れだ。

ここで無用の意地を張って、そっちの好きにしろと突っ撥ねることに益はないとわかっている。

「では……ポーカーで」

遠慮なく一番得意なものを選択させてもらい、背筋を伸ばした。

きっちりとしたスーツに包まれた広い背中を見ながら、無言でついて行く。

どこに行くのか、喉元まで込み上げてきた言葉を何度呑み込んだだろう。

多喜がついて来ていると、足音で把握しているのか……逃げられるわけがないと高を括っているのか、少し前を歩く男は一度も振り返らない。

ゲーム台の並ぶフロアの奥にある扉を抜け、細い廊下を歩くこと二十メートルほど。

多喜を先導していた男が足を止めたのは、何の変哲もない白い扉の前だった。ドアノブを捻り、扉を開けてからこちらを振り返る。

ビクリと身を竦ませた多喜になにを思うのか、表情を変えることなく腕を掴んで引き寄せられた。

「……お帰りなさいませ、オーナー」

「ああ。戦利品だ」

室内に向かって背中を押された多喜は、一步、二歩……扉のすぐ脇で待ち構えていた別の男の前に歩み出る。

チラリと多喜に視線を向けた男は、ここまで多喜を連れてきた男とは異なる、ひんやりとした空気を纏っていた。

眼鏡越しに目が合い、さり気なく視線を逸らす。

なんだろう。あからさまに威圧感を漂わせているわけではない。スラリと背が高く、高級そうなスーツを身に着けていて……端正な美形だ。モデルか俳優のような印象なのに、うまく言葉にできないけれど「怖い」と感じてしまった。

カードゲームで対戦した男は確かに迫力があるが、気圧されはしたものの目が合うのを怖いとは思わなかったのに……。

震えそうになる手を握り締めた多喜は、観察していることを悟られないよう、チラリと室内に視線を走らせる。

あまり広くない部屋の奥には、店内を映している鮮明な画像のモニターがズラリと並んでいる。

どうやら、モニタールームのようだ。ここのモニターで、多喜がカードゲームで勝ち上がる様子を見ていたのだろう。

「見かけはこうだが、なかなか手強かったぞ。久しぶりに血が沸いた」

「確かに、楽しそうでしたね」

二人の男の会話を耳にした多喜は、奥歯を噛んで視線を足元に落とす。もう少しで勝てそうだったのに……と思えば、悔しい。

でも、どうすれば勝てたのかわからないほど、対戦した男は勝負強かった。ディーラーによるイカサマを、疑う余地さえなかったのだ。

「度胸といい、自ら勝ち取ろうという意外性といい……気に入った。もう一人、使える人間が欲

しいと思っていたんだ」

疲弊している多喜とは違い、男は楽しそうな声で口にする。それを聞いていたもう一人の男が、小さく息をついて言葉を返した。

「それだけじゃないでしょう？」

「……さすが、鋭いな。まあ、容姿も好みだ。ゲームの進め方を見ていたら、頭の回転も悪くない。ってわけで、教育は尚央に任せた」

男の言葉に、尚央と呼びかけられた男は眼鏡の奥で目を細めて、今度はこれ見よがしなため息をつく。

多喜は二人の会話の意味がわからず、怪訝な顔をしているはずだ。尚央と呼ばれた男が多喜に視線を向けてきて、目が合った。

数秒、見据えてきたかと思えば……。

「名前は？」

決して威圧的ではないのに、逆らえない空気を漂わせている。

短く尋ねられ、コクンと喉を鳴らして答えた。

「秋川多喜……です」

「よろしい、多喜。あなたがここでボーイをしていたことに対する経緯は、おいおい聞かせてもらうことにしましょう。この方に仕える気はありますか？」

言葉はやんわりとしたものだが、多喜を見遣る視線は鋭い。威嚇しつつ尋問されているとしか思えない。

だいたい、カードゲームに負けて「俺のモノだ」と宣言した男に連れられてきた多喜は、自分の身がどう処されるのかよくわかっていないのだ。

「仕える……って言われても」

なにをすればいい？ なにができる？

チラリと、横目で男を見遣る。

正体不明……いや、このカジノのオーナーらしいというのはわかっているが、知っていることといえばそれだけだ。

戸惑うばかりの多喜に、男が「あれ？」と首を傾げた。

「名乗っていなかったか？ 伊勢谷凱成。このカジノの城主だ。そこにいるのは、田倉尚央。有能だがドSの秘書……って、睨むなよ。おっかないな」

言葉が終わる前に、当の秘書に睨まれたらしい。ふざけた調子でぼやくと、多喜と視線を絡ませた。

目に捕らわれた瞬間、自然と肩に力が入る。本能が、この男に逆らうことはできないと悟っているようだ。

「異論は受け付けない。俺のモノだからな」

尊大な態度で、所有権を主張される。

カードゲームに負けたのは事実なので反論することができなくて、多喜は唇を引き結んで伊勢谷から視線を逸らした。

多喜自身に仕える気があるがなかろうが、この男には関係なさそうだ。既に、決定しているのだから。

なにも言えない多喜に代わり、田倉がこれ見よがしなため息をつく。

「……酔狂な。好みの外見というだけで、観賞目的に傍に置くのは結構ですが……新しいオモチャを手にしても、どうせあなたはすぐに飽きるでしょう。不要になったものを片づけるのは、私ですからね」

無表情で淡々と言い放った田倉の台詞に、多喜は表情の変化を悟られないよう密かに眉を顰めた。

飽きればポイ捨てされる、オモチャだと……決めつけられている。

しかも、言葉の裏には「見てくれだけで、どうせ使いものにならない」というたっぷりの毒が見え隠れしていて、普段は押し隠している負けず嫌い根性を刺激された。

「……使いものになれよ、多喜」

「ッ……」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>